



故渡辺和子理事長様を偲んで

1期生 橋 本 光 司

1期生が自慢できることの一つに、入学から卒業まで6年間ずっと渡辺校長先生のもとで小学校生活を送ったのは唯一、1期生だけということがあります。

シスター・セント・ジョンとお呼びしておりました当時の渡辺学長様は、附属小学校長をされながら附属幼稚園長もされ、さぞお忙しくご苦勞も多かったことと今では推察いたします。しかしいつも凛とされ、そして優しく品格を感じさせられるお姿が当時の記憶として鮮明に残っております。校長先生としてのお話をたくさんしていただきましたが、一番の記憶に残っている言葉は附属小学校のめざす子どもの像である「聡明な子ども」・「思いやりのある子ども」・「心身ともにたくましい子ども」です。「子ども」を「人」に置き換え、現在にいたるまで規範といたしております。

卒業後は第2代同窓会長や学園評議員を拝命した時期があり、

子供達も附属小学校でお世話になりましたので、渡辺理事長様のお話を拝聴する数々の機会をいただき、ご著書を拝読することでも理事長様に対する尊敬の思いは大きくなるばかりでした。現在委員を拝命いたしております教育基金の運営委員会が開催された昨年9月にお会いした時、理事長様は基金に対する思いを静かにしかし強い信念に満ちた口調でお話しされました。その時はそれがお別れとなってしまうとは思ってもよらないことでした。

昨年12月突然の悲報に接し、本年2月に追悼ミサ並びにお別れ会で最後のお別れをさせていただきましたが、素晴らしい教えと思い出を授けていただき有難うございました。どうぞ神様のもとでお父上の錠太郎様、ご家族の皆様とともに安らかにお過ごしください。



渡辺先生にいただいたもの

4期生 田淵（松原）利江

創立50周年を心よりお喜び申し上げます。

私は5年生の時、公立小学校から転校するご縁があり、卒業までの短い2年間でしたが濃厚な学びを受けさせていただきました。生徒達、先生方も人生で大きく影響を受けた第一は、渡辺和子先生ではないでしょうか。私が転校した時は、附属小学校の校長先生としての兼務を退かれ大学の学長に専念されておられたと、子どもながら記憶しています。それでも時々お目にかかる、クラスメートたちは皆「校長先生ー」と走りより、スキンシップを受けていました。私は、輪の外からシスター渡辺を見つめていました。何の宗教的知識も持たない小学5年生の私でもシスター渡辺は子供の頃の私にとって、他の場所では出会う事の出来ない存在であることを感じるオーラをもっておられたのです。

卒業後も何かの折に触れてお名前を聞くたびやマスコミに取り上げられるたび、また機会があり講演を聴かせて頂いたりした時、そしてお亡くなりになった今でも、これからずっと人々に影響を与え続けておられますね。

実はおこがましい話なのですが、もう随分前に、職場の同僚がシスター渡辺の講演を聴いた後で「やっぱり、利江ちゃんの仕事っぷりを見てるとノートルダム清心の教育を受けたからだと思った」と言ってくれたのです。本当に驚きました。私はとてもそんな立派な人間ではなく、我儘で自由奔放な人間だからです。自覚していることは、クラスメートの輪の外からじっとシスター渡辺を見つめていた幼い私は、大人になって先生のベストセラー「置かれた場所で咲きなさい」に何度も何度も助けられたということ

です。

また、思い出すのが、お御堂の空気感が大好きでいつも先生方やクラスメートと歌っていた「マリヤさまのこころ」という聖歌です。

マリヤさまの	こころ	それは	あおぞら
わたしたちを	つつむ	ひろい	あおぞら
マリヤさまの	こころ	それは	かしのき
わたしたちを	まもる	つよい	かしのき
マリヤさまの	こころ	それは	うぐいす
わたしたちと	うたう	もりの	うぐいす

清心高校在学中に、作業療法士という職業を知り大学に進学し、今もクリニックで働いています。お年寄りのリハビリテーションを指導させて頂いていますが、この年になっても失敗したり、難しいこともたくさんあります。そんな時、私はいつも無意識にお年寄りその方の中でのマリヤさま、そしてシスター渡辺を探しているのだと思います。それにより癒され、力を頂き、また働く事が続けられているのです。

今こうして思い起こせば、熱心に教育してくださった先生方、クラスメート、ノートルダム清心という小学校を選んでくれた両親に感謝の気持ちでいっぱいです。感謝の気持ちはいっぱいなのですがつたない文章で申し訳ありません。

ノートルダム清心附属小学校のますますのご発展をお祈りしています。



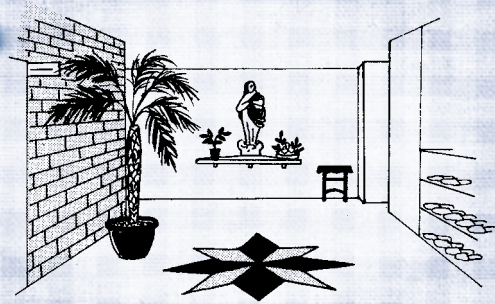
シスター渡辺和子先生の思い出

5期生 福 田 浩 子

「尊敬する人…マリア様、シスターセントジョン」。清心小学校の卒業記念の交換ノートに私はそう書きました。あれから長い年月が経ちましたが、私にとって清心幼稚園、小学校で過ごした8年間は天国の原風景だったと思います。どんな時でも、私の全てを受け入れ愛してくれる場所、清心のことをずっとそう思っていました。それはまさに神の国のことであり、イエス様、マリア様と、私にとって清心のシンボルであったシスター渡辺先生は子供心に1つに繋がる存在でした。時折校庭を歩いていらしゃったシスターの姿を見かけると、と

ても嬉しくて駆け寄って行きました。生徒全員の名前を憶えて下さっていました。大人になってイタリアに留学していた時に、どうしても清心で感じたあの温かさに触れたいと思い、カトリック教会に通い始め、洗礼を受けました。今信者として奉仕やチャリティ活動をして頂けることに感謝でいっぱいです。渡辺先生の著作を読み、その度に知恵と勇気を頂きました。それは私の宝物です。でもシスターが遺して下さった一番の宝物は、私の心に神様の愛と天国の清らかな温もりを、身を以て伝えて下さったことだと感じています。

50周年を迎えて



清心小のバトンを受け継いで

現校長 服部 和也

同窓会組織をより活性化していくために、家光前校長先生の提案で始めた同窓会報が今回第9号を迎えたところで、50周年になりました。当初は教職員が中心となって編集していましたが、年に数回同窓生たちが集まって編集会議が行われるように発展してきました。創刊から時間が経過するにつれて、発行を支援するための協力金は縮小していく傾向にあるのが普通だと思いますが、清心小の場合は、発行を続けていくだけの資金を9年間確保できたことになり、同窓生の皆様のご支援に改めて感謝しています。

学校では、50周年事業として記念誌の作成にも取り組んできました。今回は、思い出を集めるという内容を超えて、50年間変わらず学校が伝えてきたことは何か、清心で学んだことがその後の生活にどう影響してきたか、というようなことを様々な立場の人たちからお話を聞くことによって、「清心小の不易を探る」というものを目指しています。そのために、同窓生の何人かにインタビューの協力をお願いしました。久しぶりに小学校を訪ねてくれた卒業生たちは、時間の経過の中で、それぞれ自分たちなりに努力を重ね、自己実現していて、とてもまぶしく感じられました。忘れかけていたなつかしい担任時代のことがよみがえってきたり、自分は何が伝えられたのだろうかかと振り返ったり、よい機会をいただいたと思いました。

先輩達から受け継いだ清心小のバトンを持ってまだ走り続けています。次の人たちに渡す準備をしながら…



お祈り、シスターの姿、制服、弁当 黒いランドセル、そして「校歌」

第9代校長 松浦 孝之

附属小学校の卒業生で既に大学生や一般成人となっている方に出会ったとき、「附属小で思い出すことは」と尋ねることが多い。

多くの方が「お祈り、シスターの姿、制服、弁当持参、黒いランドセル…」などと次々と答えてくれる。これらはすべて目に見える形あるものであるが、その時の卒業生のキラキラした表情からは、これらを通して育まれたに違いない、目に見えない何かが伝わってくる。

なかでも「まこと求める窓辺には 青い小鳥も呼んでいる。…白くそびえるおみ堂に 聖母マリアはほほえみまもる。…」と歌われる「校歌」への愛着は強い。

この歌詞には学園の創立者マザー・ジュリーの教育理念「心を清くし 愛の人であれ」の意向のもと、附属小の「そう明な子ども 思いやりのある子ども 心身ともにたくましい子ども」の三つのモットーが見事に織り込まれている。

社会には変えてはいけないうこと、変えなければならないことがあるが、附属小開校以来50年、一貫して変わらない生涯の心の糧に出会えた卒業生は幸せである。

世代が違っていても、卒業生誰でもが歌詞を覚えていて一緒に歌える校歌。

どうか、どこかで、何人かでもが出会ったときには、いつでも「校歌」を共に声高く歌ってほしい。そして、母校に思いを馳せ、改めて附属小卒業生としての誇りと自覚を持ち続けてくれることを祈っている。



優しい子どもたちに囲まれて

第8代校長 方川 淳

私は、教員生活の最後を、清心小学校で過ごさせて頂いたことをこの上ない幸せに思っています。

清らかで、優しい心を持つ子どもたちに囲まれた日々は、とても楽しく、貴重なものでした。

当時、清心小学校では、いじめなどの理由で、地元の小学校に通えなくなった子どもを、毎年一〜二名受け入れていました。

この子たちは、清心小学校に転入してからは、決まって元気になり、友達と楽しく学校生活を送っていました。

カトリックの学校の温かい雰囲気と子どもたちの優しさのせいでしょうか。

五年間の勤務の中で、今も忘れられない出来事が二つあります。

一つは、私の新任式の日のこと。式が終わり、記念館から校舎に向かって私のところへ、小さな二年生の女の子がやって来て、「校長先生のお部屋は、こっちだよ」と手を引いて案内をしてくれたことです。これには本当にびっくり。

二つめは、退任のとき。最後の終業式を終えて校長室にいた私のところに、帰り仕度をした子どもたちが続々とやって来たのです。手には小さな手紙を持っていました。

「校長先生やめないで!」「優しくしてくれて有り難う」など、子どもたちの優しい思いが書かれていました。

四十年を超える私の教員生活で、こんなに感動したことはありませんでした。春休み中も手紙は毎日のように届きました。

このときの子どもたちからの手紙は、今も、私の大切な宝物です。



飛躍の年に

第10代校長 家光 大蔵

2005年4月から2011年3月まで6年間附属小学校をさせて頂きました。2006年新校舎建築、2007年40周年を迎えたこと、休憩時間運動場で子どもたちと一緒に遊ぶことなど、今も鮮明に覚えています。

50周年を迎えることができたのは、渡辺和子理事長様、高木孝子学長様のお力添えと、服部和也先生はじめ教職員の皆様のご尽力と、保護者の皆様のご支援があったからこそと感謝いたしております。

高木孝子学長様には公務ご多忙にもかかわらず、小学校や子どもたちの様子について数えきれないほどお聞きくださいました。いつも温かいご助言をいただき、そのたびに元気をいただいたものです。

渡辺和子理事長様にもよくお会いしました。理事長室からの帰り際にはいつもエレベーターの所までお見送りくださいました。エレベーターで一緒した時、「みんなはね、エレベーターが着くとすぐボタンを押すでしょ。わたしはね、エレベーターを降りるまで、『主の祈り』を祈って待つようにしているのよ。」とお話くださったことがいまでも心に残っています。

渡辺理事長様は天に召され、高木学長様は学長職を退かれましたが、新たな体制で、50周年の節目にさらなる飛躍をと願ってやみません。